

## 令和4年産水稻の作況調査結果と当面の技術対策

技術支援課  
(普及指導室)

生育ステージ	<p>早期：収穫終了                      早植：収穫期～収穫終期                      普通期：黄熟期～成熟期</p>
生育概況	<p>早期：「コシヒカリ」の成熟期は平年並み～3日遅れた。白未熟粒がやや多いため品質は2等中心で平年より劣るが、収量は平年並み～やや多い。</p> <p>早植：「コシヒカリ」「ひとめぼれ」の成熟期は概ね平年並みだが移植時期や地域によって異なる。未熟粒、胴割粒、斑点米が見られるものの品質・収量は平年並みの見込み。</p> <p>普通期：「あさひの夢」の成熟期は平年並み～やや遅れる見込み。出穂期頃の曇雨天により穂揃いが悪かったため、登熟にむらが見られる。</p>

### 1 気象経過 (前橋地方気象台の気象データ、9月は第3半旬までのデータ、参考資料参照)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
気温(平年差)	+1.6℃	-0.1℃	+1.1℃	+1.7℃	+0.6℃	+1.1℃	+0.6℃
降水量(平年比)	152%	169%	83%	123%	52%	97%	69%
日照時間(平年比)	88%	112%	118%	108%	82%	89%	79%

### 2 生育概況

#### (1) 概要

##### ア 早期・早植栽培 (6月15日以前の田植)

早期栽培「コシヒカリ」の出穂期は平年より2日早まったが、成熟期は8月中旬以降の寡照の影響で平年並み～3日遅れた。出穂後の高温等の影響で白未熟粒等が見られるため2等が多く平年より劣るが、収量は平年並み～やや多い。

早植栽培「コシヒカリ」「ひとめぼれ」の出穂期は、平年並み～3日程度早まり、成熟期も概ね平年並みだが寡照のため登熟が緩慢となったため、移植時期や地域によってやや異なる。稈長がやや長く、8月下旬以降の強雨のため倒伏が多い。収量は平年並み～やや多いが、高冷地などではやや少ない傾向。品質は乳白粒や斑点米が見られるものの概ね平年並みである。病虫害は、紋枯病、内穎褐変病、中山間地で斑点米カメムシ類、一部で穂いもちが多い。

##### イ 普通期栽培 (6月16日以降の田植)

生育ステージは黄熟期～成熟期。出穂期は平年並み～2日遅れ、出穂期頃に曇雨天の連続により、穂揃いまでに日数を要した。そのため1穂内での登熟状況に差が見られており、成熟期も平年並み～3日程度遅れる見込み。病虫害は、紋枯病や内穎褐変病が多い。

#### (2) 病虫害・障害等の発生状況

「コシヒカリ」「ひとめぼれ」で倒伏が多い。

全域で紋枯病、内穎褐変病が多い。

中山間地域で斑点米カメムシ類がやや多い。

北毛・東毛の一部でイナゴ類がやや多い。

一部地域で穂いもち、稲こうじ病、もみ枯細菌病が平年よりやや多い。

(3) 作況は等の調査結果等

ア 作況は等の調査結果（表1参照）

県平均の出穂期は8月13日（平均比±0日）であった。出穂後30日の穂重は697g/m<sup>2</sup>（同103%）であった。早期・早植栽培の成熟期は9月22日（同+1日）であった。

イ 農業技術センターの生育基本調査結果

(ア) 稲麦研究センター（6月24日移植）

「ゆめまつり」の出穂期は8月30日（過去9カ年平均比±0日）、成熟期は10月13日（同-6日）、稈長は83cm（同104%）、穂長は20.8cm（同98%）、穂数は338本/m<sup>2</sup>（同83%）であった。

(イ) 東部地域研究センター（6月1日移植）

「ゆめまつり」の出穂期は8月21日（過去10カ年平均比+2日）、成熟期は10月5日（同+1日）、稈長は73cm（同93%）、穂長は21.6cm（同105%）、穂数は324本/m<sup>2</sup>（同84%）であった。

表1 水稲作況は等調査結果（地域別・作期別）（）内は平年比

調査項目 地区	移植期 月/日	出穂期		出穂後15日（暫定）		出穂後30日穂重	成熟期	
		月日	穂数/m <sup>2</sup>	籾数/m <sup>2</sup>	g/m <sup>2</sup>	か所	月日	
県	6/5(+1)	8/13(0)	383(108)	32,169(112)	697(103)	11/14	9/26(+1)	
中部	6/15(0)	8/20(-1)	358(96)	31,502(103)	654(100)	2/4	9/24(+2)	
西部	6/5(-1)	8/13(0)	365(97)	31,355(96)	673(98)	2/3	9/27(0)	
北部	5/22(0)	8/4(-3)	363(94)	27,455(101)	640(97)	4/4	9/23(0)	
東部	6/6(+5)	8/11(+3)	386(105)	31,672(106)	759(109)	3/3	9/29(+4)	
早期・早植	5/28(0)	8/7(-1)	381(100)	29,406(103)	672(101)	10/10	9/22(+1)	
普通期	6/24(+1)	8/28(0)	359(99)	33,201(100)	695(99)	1/4	10/15(+1)	

注1) 県、地区、作期別の平均値は加重平均とした（成熟期を除く）。

2) 移植期欄の（）内の「-」は早い、「+」は遅いを示す。

3) 出穂15日調査結果は、調査時期となったほ場のみで、か所数欄は〔調査か所/設置か所数〕を示す。

4) 早期・早植：6月15日以前の田植。普通期：6月16日以降の田植。

5) 高崎市、片品村は品種が変更となったため、西部平均・北部平均・県平均から除外した。館林はほ場が変更となったため、移植時期が平年より7日遅れて移植したデータである。

(4) 作柄のまとめ（表2）

各地域の作柄は、中部・西部・北部が「並」、東部が「やや良～並」であり、県全体では「並」が見込まれる。

表2 地帯別作柄概況（）内は普及指導課・地区農業指導センター

地域別	作柄	作柄概況
中部 （中部） （渋川） （伊勢崎）	並	<ul style="list-style-type: none"> <li>早植栽培：収穫終了。成熟期は平年並み～やや早まった（渋川）。降雨による倒伏の発生が多い。収量は中山間地では平年並みだが、平坦部ではやや少ない。品質は未熟粒等が見られるため2等中心で平年並みの見込み（中部）。</li> <li>普通期栽培：黄熟期～成熟期。出穂期は平年並み～2日遅れ、成熟期は平年並み～3日程度遅れる見込み。出穂期が曇雨天で気温が低く、穂揃いが長期化したため登熟むらが見られる（伊勢崎）。寡照による乳白粒の発生が懸念される（中部）。</li> <li>病害虫は、紋枯病、内穎褐変病、斑点米カメムシ類が多く、一部でもみ枯細菌病がやや多い（伊勢崎）。</li> </ul>
西部 （西部）	並	<ul style="list-style-type: none"> <li>早植栽培：収穫期～収穫終期。寡照により登熟が緩慢となったため、成熟期は平年並み～やや遅れ、降雨により収穫作業も遅れた。白未熟粒や斑点米が見られる</li> </ul>

(藤岡) (富岡)		<p>が平年並みの見込み（西部）。稈長が長く強雨により一部で倒伏が発生した（西部、富岡）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>普通期栽培：黄熟期～成熟期。出穂期は一部で遅れたが概ね平年並み、成熟期は平年並み～2日遅れる見込み。出穂期の曇雨天により穂揃いまでに期間を要したため青未熟粒の混入が懸念される（藤岡）。</li> <li>病害虫は、紋枯病、内穎褐変病、一部でもみ枯細菌病（藤岡）、中山間で斑点米カメムシ類（西部）が多い。</li> </ul>
北 部 (吾妻) (利根 沼田)	並	<ul style="list-style-type: none"> <li>早植栽培：収穫終期。出穂期は平年並～3日早まり、成熟期も平年並みから3日早まったが一部でやや遅れた。9月以降の降雨により倒伏が多く、収穫期の降雨により収穫作業が遅れている（吾妻）。収量は地域や移植時期により大きく異なり、高冷地や遅植では少ない傾向。品質は胴割粒や斑点米が見られるものの1等比率は80～90%で概ね平年並み。病害虫は内穎褐変病、斑点米カメムシ類、イナゴ類（利根）、稲こうじ病（利根）がやや多い。</li> </ul>
東 部 (東部) (桐生) (館林)	や や 良 ～ 並	<ul style="list-style-type: none"> <li>早期栽培：収穫終了。「コシヒカリ」の出穂期は平年より2日早まったが、寡照の影響で成熟期は平年並み～3日遅れた。高温による白未熟粒等が多いため2等中心で平年より劣るが、収量は平年並み～やや多い（館林）。</li> <li>早植栽培：収穫期～収穫終期。「ひとめぼれ」「コシヒカリ」の成熟期は一部で平年並み～早まったが一部で遅れた。8月下旬～9月上旬の強雨のため倒伏が多い。穂数・籾数がやや多く、収量は平年並み～やや多い（桐生）。品質は、平坦部の「ひとめぼれ」は乳白粒が多いが、「あさひの夢」の1等比率は90%以上。</li> <li>普通期栽培：黄熟期～成熟期。出穂期・成熟期は平年並みだが、遅れ穂が多く、成熟にむらがある（東部）。穂数は平年並み～やや多い（桐生・東部）。品質・収量は平年並みが見込まれる（館林）。</li> <li>病害虫は、紋枯病、内穎褐変病、斑点米カメムシ類（桐生）、イナゴ類やササキ類（館林、桐生）、穂いもち（桐生）、稲こうじ病（館林）の発生がやや多い。</li> </ul>

### 3 技術対策

- (1) 登熟状況の確認や気象状況に留意し、適期収穫を行う。適期の判定は、出穂期後の積算気温、帯緑色籾歩合、籾水分などにより総合的に行う。本年は出穂・開花がばらつき、生育がやや遅れているため、極端な早刈りや高水分での収穫に注意する。
- (2) 倒伏した場合は、速やかに排水し、成熟状況を見て早めに収穫する。収穫期に穂発芽等が認められる部分は可能な限り別収穫とし、品質低下を防止する。
- (3) 自脱型コンバインによる収穫作業は、籾の損傷軽減や作業能率向上のため、朝露が消えてから開始する。脱穀籾は含水量が高く変質しやすいので速やかに乾燥に移す。
- (4) 乾燥については、過乾燥・急速乾燥に留意して、乾燥機の毎時乾減率は0.8%以下とし、籾水分14.0～14.5%（玄米水分14.5～15.0%）に仕上げる。高水分籾の場合、急速乾燥は胴割粒を発生させるので、初期は通風のみで乾燥を行い、水分むらを解消してから穀温40℃以下の低温で乾燥を行う。さらに籾水分18%で一旦停止して半日程度貯留した後、再度乾燥を行うと胴割粒の発生をより抑制することができる。
- (5) 調製については、網目を1.8mm以上とし、整粒歩合80%以上を目標に仕上げる。選別機の処理能力以上の粗玄米を流さないよう丁寧に行い、整粒の確保を図る。稲こうじ病の発生が多い場合は、特に丁寧な調製を行い、可能であれば色彩選別機を活用する。
- (6) イネ縞葉枯病対策および地球温暖化防止の観点から、収穫後は早めに耕起し、ひこばえを残さないようにするとともに、ワラの腐熟促進を図る。
- (7) 種子伝染性病害（ばか苗病、いもち病、もみ枯細菌病等）の症状が見られるほ場での自家採種は避け、種子を更新する。令和5年産の育苗では、種子消毒や温湯消毒の温度管理、催芽～育苗時の温度管理等を厳正に行う。また、いもち病対策として育苗床周辺へ稲わらや籾殻を放置しない。
- (8) いもち病や紋枯病が多発する年次が多いため、本病が問題となっている地域では令和4年産は本病に高い効果のある箱施用剤を広域的に使用する。本田で発病が見られる場合は、早急に防除を行う。
- (9) 農薬等の使用状況の記帳確認を行う。

《参考資料》

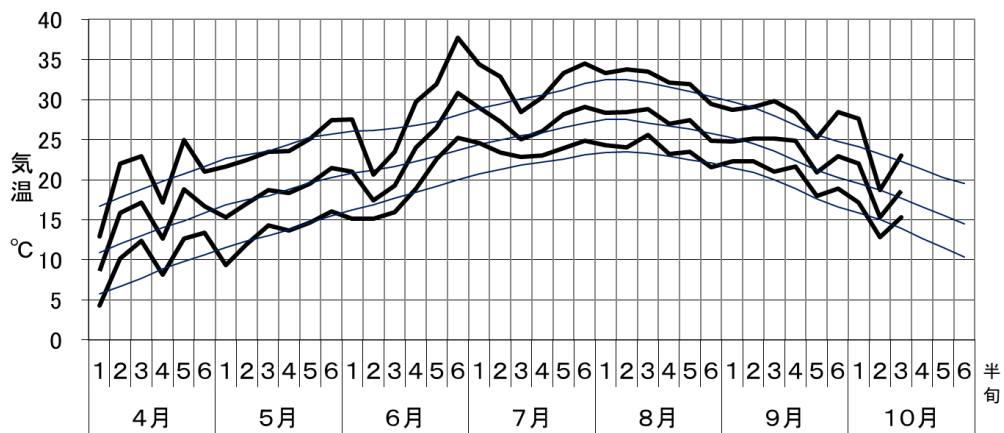


图1 气温

— 本年 — 平年

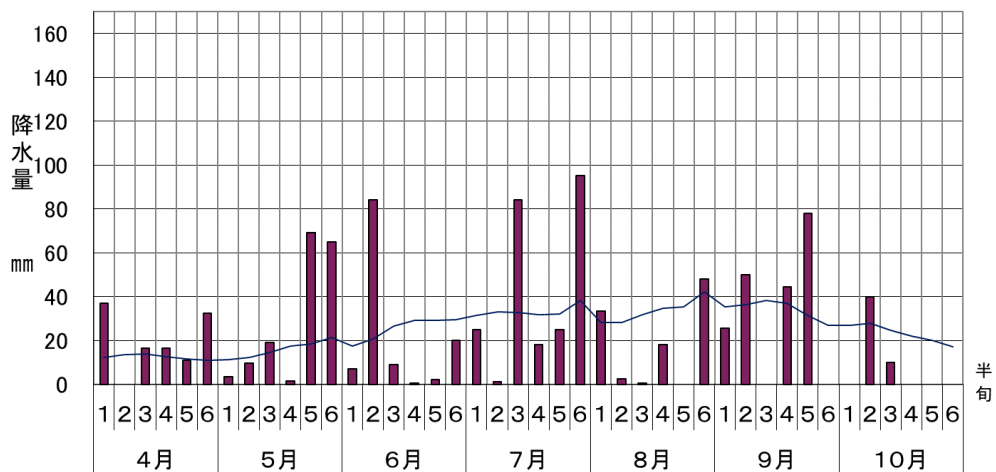


图2 降水量

■ 本年 — 平年

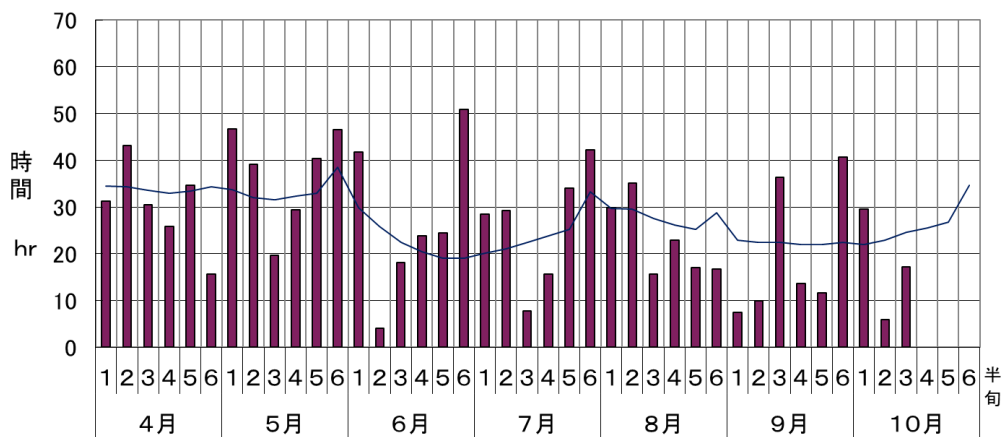


图3 日照時間

■ 本年 — 平年